



70年生まれ。96年から北里大病院に勤務。99年から緩和ケアチーム薬剤師として活動。05年から東京女子医大病院に勤務し、07年にがん薬物療法認定薬剤師に。

### がん薬物療法認定薬剤師

患者を支える人々

## 伊東俊雅さん

かつて病院の薬剤師は主に医師の処方箋に沿って調剤したり薬品を管理したりしていた。最近では外

来でも病院でも、患者と接しながら薬学の専門性を発揮することが多い。がんの領域では、日本病院薬剤師会のがん専門薬剤師（全国に116人）とがん薬物療法認定薬剤師（同424人）の2種類の資格がある。

東京都新宿区の東京女子医大病院薬剤師には75人の薬剤師がいる。がんの薬物療法で8年の経験があり、がん薬物療法認定薬剤師の資格を持つ伊東俊雅さん（38）は膀胱癌、大腸、胃など消化器の病気の患者や、がんの化学療法（抗がん剤治療）がんの痛みや不快な症状を改善する緩和ケアを受けるため入院する患者をサポートする。受け持つ病床は97床だ。

入院初日に持参薬をチェック。入院中は病室を訪ねて患者に薬の成分や働きを説明したり、「薬がのみにくい」などの相談や質問を受けたたりする。薬の効き具合や副作用の早期発見に気を配り、伊東さんの方から「夜は眠れますか」「星元はふらつきませんか」と声をかける。

東京都中野区の村上典子さん（69）は胃がんがリンパ節に転移して入院した。「新しい抗がん剤治療を始めたのに、副作用で吐いた

り下痢したり。でも、薬剤師さんがベッドまで来ているという説明してくれるので安心です」

副作用がひどくなってからは、命にかかわることもある。「体の変化はどんなことでも薬剤師に話してください」と伊東さんは言う。

退院時は、日常生活で薬をのみ忘れないためのアイデアや管理法などを助言する。

伊東さんは緩和ケアチームの一員でもある。痛みの治療に詳しい麻酔科医、心のケアが専門の神経精神科医や臨床心理士、緩和ケアに精通した看護師や薬剤師が顔を並べ、毎週、入院患者の枕元をチームで訪ねる。

前夜、痛みで眠れなかったという女性は、医療用麻薬の効果で、チーム回診時には穏やかな表情だった。「どんな症状でも、がまんしなくていいんですよ」。がん特有のいやなにおいも、院内でつくる軟膏で改善できる。

伊東さんは18歳のとき、幼なじみを悪性リンパ腫で亡くした。「いつか、がん医療に役立つ薬の研究もできれば」

（医療ジャーナリスト・福原麻希）

（アスパラクラブのホームページに福原さんの取材記を掲載しています）

# ①病室訪ね、薬の説明や相談 ②退院時も管理法など助言